

題にされた機械化、育畜化、共同化等を中心とした農業近代化に積極的にとりくまず、消極的に多角経営をとり入れて経営の合理化をはかろうとしたため、蔬菜栽培においては零細多種目栽培を主とし、酪農も小規模経営、養豚も豚小作が残存する位に零細なものがほとんどという形になったといえる。

ところで他地域におくれながらも昭和35、6年以後、農産物の商品化の一層の進展とともに農業経営においても新しい動きが見え始めた。それは小規模多角経営から専門的な経営への変化であり、酪農・養豚・養鶏・蔬菜栽培等の部門で規模も今までになく大きいものがあらわれるようになったことである。こうした変化をもたらしたものとして考えられるのは、一つには、陸稻・麦・甘藷中心では、生計を維持していくのが困難になってきたこと、次に労働力不足からの機械の導入が土地条件の改善をもたらした他、耕地の交換介合、集団化をも促進し専門的経営を可能にしたこと、第3に藤沢市北部地域の工業化に伴う道路の整備もあげられるが、農協の指導、資金貸付も大きく作用しているようである。

しかし農業におけるこのような動きは、全体からみたらごく一部の余裕のある農家に見られるもので、より大きな動きとして、兼業化、即ち、農業は片手間に自給作物を作るだけという農家の増加が目立っている。

藤沢市において本地域は、現在農業地域であり、また将来も農業地域として残るべく計画されている。しかしながら、農地の転用からみても宅地化、工場用地化する土地は年々増えており、藤沢市北部の工業的開発が進むとともに兼業機会も増大することになり、農家も、自給飯米を目的とし、農業に積極的でない層と、近くに新たに加えられた市場をも目的とする近郊蔬菜、酪農等の商業的農業と行う層との差が大きくなっていくのではないかと思われる。

以上農業を中心に本地域の特色をまとめてみたが、台地の低位生産性と安易な主穀作への依存から昔ながらの農村地帯として残されていたこの御所見地区も、周辺の変化とともに内部からも変りつつあることを感じさせられた。

松本盆地中部扇状地の地理学的考察

長谷川喜久子

調査地域の設定理由は、郷里であること、扇状地に興味があったこと、フォッサマグナの西縁の断層崖下の扇状地という、ほぼ同条件下の数扇状地の

中で、土地利用に大きな差があること等である。

又、自然地理により興味をもちたことから、この地域の地形を分類する際、信州ローム（関東ロームとの対比もされている）が存在するので、微地形的な分類だけでなく、出来る限り広い地域をまとめて、把握することに、地形分類の意義を認めたため、本調査地域のように、かなり広い地域を設定した。

したがって、卒論の主眼は、地形区分及び編年、土地利用の各扇状地の相違及びその原因、で最後に地域性として総括した。

卒論の内容構成は次の通りである。

第一篇 総説

第一章 自然概説

第一節 位置

第二節 地質

第三節 地形

第四節 気候

第二章 人文概説

第一節 人口

第二節 集落

第三節 産業

第二篇 細説

第一章 地形

第一節 地形区分の基準

第二節 地形区分

第三節 梓川扇状地の段丘面と扇状地面との対比

第四節 扇状地と水

第二章 土地利用

第一節 農業区

第二節 開発の歴史

第三節 農業区と扇状地の関係

第四節 将来の農業区

第三章 養蚕業 — 農業経営における地位

第四章 地域性

第一節 新産業都市

第二節 地域性

地形については、次のような地形面の分類をした。

1. 分離丘陵

2. 扇状地面

扇状地Ⅰ面

扇状地Ⅱ面

扇状地Ⅲ面

3. 沖積錐、小扇状地

4. 崖錐、すそ合谷

本卒論の中心課題である扇状地についてみると、扇状地Ⅰ面は、表層に一次火山灰が堆積していて、その厚さは、北にいく程うすくなっている最も古い最上位の扇状地面でかつ最も急傾斜である。扇状地Ⅱ面は二次火山灰が堆積し、中位面で傾斜はⅠ面より緩やかでⅢ面より急である。扇状地Ⅲ面は、火山灰が存在しない沖積面である。最も緩傾斜であって、埋没火山灰直上に土師、須恵器の存在する所もある。ということがいえる。土師、須恵器が基準となって、小林国夫氏が編年を行なった梓川段丘に対比した。

次に土地利用についてであるが、特色としては、黒沢川扇状地が畑地区として区分され、桑園にかわって果樹園が多くなってきていること、烏川扇状地は、扇状地Ⅰ面を除いて、水田化が進み、桑園は、ほぼ旧自然堤防上に限られている。中房川扇状地はⅠ面とⅡ面がそれぞれ、畑地区、平地林地区に区分され、Ⅱ面は水田地区である。以上から3つの扇状地で、最も差の大きい事は、黒沢川扇状地のみが畑地区である、ということだ。この原因としては、先ず、水が非常に少ないこと、江戸時代の新田開墾の計画に対する村民の非協力的態度及び松本藩の消極性によって計画が実施されなかったこと、等が考えられる。又、桑園が果樹園に変わりつつある理由としては、これらは立地条件がほとんど等しく、戦後果物の需要が増してきたこと、養蚕業はアメリカ市場の生糸需要がそのままひびき、不安定であること、反当収入が果樹栽培の方が多いこと、等が考えられる。これは長野県全体の傾向である。

水田化の進んでいる烏川扇状地と中房川扇状地について、水田の分布状態をみると、中房川扇状地はⅡ面である旧河道と扇端部に限られている。このちがいの原因について考えてみると、先ず開墾の歴史からわかるように、ほぼ同程度に用水堰が敷かれ、水量も黒沢川扇状地に比べてかなり多いということが言え、原因は、他の因子に求められる。即ち、扇状地を形成する礫質の問題であると考えられる。烏川扇状地は古生層の礫、中房川扇状地は花崗岩の礫から成る。古生層と花崗岩の礫については、風化の仕方のちがいから、

土壌化した非常な差があり、従って、花崗岩礫の地域では、農業的土地利用がされにくいのではないかと考えられる。この点については、他の多くの扇状地例から確証をつかみたい。

以上、土地利用についての各扇状地の特長の次に、各扇状地面の特長をみると、扇状地Ⅰ面は、ほぼ畑地区である、ということがいえ、これは最高位面であるために水が得にくいこと、最も急傾斜である、という地形的制約によることの外、未調査であるが、ここは戦後の開拓のため、水利権が少ないのではないかと、ということもつけ加えて考えられないだろうか。

以上が、この地域の調査の目的とする点についてであるが、最後に、現在この地域付近が、諏訪～松本～大町の新産業都市の指定区域に定められ、このことと関連して現在は、純農村といってよい、この地域が、徐々に、近郊農村的な色彩を強めていきつつあり、将来も工業地域にはならず、あくまでも、農村地域であろう、ということが考えられる。

以上、この地域の調査主眼について要約した。卒論から導かれた最も大きな問題点として、花崗岩と古生層の礫と土地利用状態との関係という点が提起されたので、今後、この点から調査を開始したい。

ニュージーランドの地誌“人口問題を中心として”

前波敬子

ニュージーランドは、英連邦中最も小さく、最も遠距離にあり、その位置は南太平洋上南緯34°から48°の間にある、南島、北島、スチュワート島より成り、全般的に山地が多く、面積の約4分の3は標高185m以上の高地である。河川も多いが大部分は急流で短かく経済的価値が乏しい。気候は主として海流の影響をうけて温暖で寒暑の差は少なく、さわめて健康的である。雨量も十分にかなり年平均しているため、日照時間が多いことと共に牧草の成長に良く、農牧畜業に最適である。

このように、ニュージーランドは地形的にも、気候的にも牧畜業に最適である。総輸出額の85%以上は羊毛、食肉、バター、チーズなどによって占められ、工業はほとんどがそれらの加工であるように、ニュージーランドの経済の基礎は牧畜業にあるが、農村に居住する人口は全人口の38%にすぎない。1957年度の人口増加は2.1%で、これはヨーロッパのいずれの国よりも高い増加率である。国民の年齢構成からみて今後10年間に老令者の割